

エリザ・シニョーリ「伊仏両国を生きたエンリコ・ チェルヌスキ：リソルジメントの民衆革命参加と 第二帝政下の金融・財政活動」

——1998年6月20日、日仏会館での国際シンポジウムにおける口頭報告——

勝 田 由 美（翻訳・解説）

Elisa Signori/ Enrico Cernuschi tra Italia e Francia :
Dalla rivoluzione democratica del Risorgimento
alla finanza e alla economia politica nel Secondo Impero
tradotto da KATSUTA Yumi

(1) ミラノ人・ヨーロッパ人・世界市民：19世紀の歴史におけるチェルヌスキ

1850年1月24日、アナキズムの罪、ローマ共和国攻略下でのフランス軍に対する挑発的行動の罪、加えて略奪罪に問われたエンリコ・チェルヌスキは、軍事法廷に自らの弁明を願いで、裁判という場には似つかわしくない朗々とした自己紹介をはじめた。「私はミラノ人です。皆さん、私の政治活動は1848年3月、フランスの革命に続いて起こったあの民衆蜂起に始まったのです。私が乱暴でも軽率でもなく、秩序と統制を重んじる実務的な人間であることはたしかです。イギリス人いうところの実直な人間であり、フランス風にいえばまじめな人間なのです。皆さん、私は、冷静に祖国を愛しているのです」。

こうした話しぶりから察せられるように、チェルヌスキは、現実離れた空想にとらわれた、革命的扇導者の常套句とは無縁であった。ミラノ生まれの彼は、ミラノとロンバルディア社会の土地柄である、進取の気性に富む勤勉家の現実的・積極的な精神を身につけながら、一方では自身の政治路線の理想の大きさを強調した。それは、感情的な急ごしらえの愛国心の帰結などではなく、まさに革命経験ゆたかな啓蒙主義のフランスを歴史的なよりどころとし、近代的・開明的な自由および民主主義の要求を基盤とする合理的信念の産物であった。

この素描的な自画像から、チェルヌスキの全生涯の解説に有効な、少なくとも二つの手がかりが浮かびあがる。まず第一に、48年ミラノ革命と翌年のローマ共和国の中心人物となったのち、慎重な実業家、フランス金融界の信用ある相談役として頭角を現わすにいたるほど、決断力と実行力、情熱、思考力を卓越した形で兼ね備えていたこと。そして第二に、故国イタリアと、選びとった理想の国フランスという二つの祖国のいずれにも、期待をもって献身し、熱心にかかわったこと。

チェルヌスキの人格における二面性は、彼の生涯や歴史的評価に長い間影響を与え、激しい非難や否定的判断を生み出してきた。チェルヌスキが外国で実業面での成功を遂げたことは、陰謀と祖国解放の闘いにいつでも身を投じた英雄的亡命者のステレオタイプとはきわめて対照的で、対立するものだった。サヴォイア王家の力によるイタリア諸国統一という、苦難の多い道程の実質的立役者となったカヴールまでもが、リソルジメントの終局に加わるべく帰国したチェルヌスキに対し、「パリの儲け仕事」を選んだとして非難を浴びせたのである。

青年時代の革命運動への参加と、壮年期の国際金融における華々しい活躍とを、一貫したものとして理解する困難さは、チェルヌスキの歴史的評価に今なお影響することがある。同様に、チェルヌスキ自身がイタリア人であると同時にフランス人でも感じているからこそ、伊仏両国では、あるときは「見捨てられた」異邦人として、またあるときは「抜け目のない」異邦人として、彼を中傷するのである。

しかし、こうした非難や中傷は、生前にうけた共感や名誉と同様に、洞察力をもって自己の時代の大事件と対決した人物の、豊かで激しい生き方を証明するものにほかならない。150年前にヨーロッパをかけぬけ、ゆり動かした、いわゆる「諸民族の春」の民主的革命経験から、古い世界の政治的展望が少しずつ砕けていき、地球全体を相互依存の統一的経済圏とする資本主義的近代化にいたる、19世紀という「長い時代」。チェルヌスキの人生は、その「大いなる歴史」にしっかりと結びついた一本の糸なのである。

(2) ミラノ、そしてローマで。革命の経験。(1848-1849)

彼の政治活動の開始地点に戻ろう。1848年3月、27歳のチェルヌスキは、経済的に恵まれ、パヴィア大学の学位をもつ民法・刑法の弁護士であった。4人兄弟の長男で、製糖業を営んでいたモンツァ生まれの父親は、幼いころに亡くなっていた。早くから偏狭な地域主義を脱しようとし、イタリアのほか、パリ、ロンドン、ベルリン、アムステルダム、ブリュッセルといったヨーロッパ各地に、つとめて仕事と勉強の旅に出た。そのすべてが、イタリア諸国の政治的停滞と市民的後進性、そしてヨーロッパ中で動き始めた進歩的な活力を、鋭敏に感知する機会であった。またそれは、多様な知的関心と知的経験に触れ、のちに彼の人格を特徴づける全ヨーロッパ的市民としての見識や感性や価値観を形づくる機会でもあった。

「あえて反革命的な基盤のうえに保たれた」33年間の平和〔ウィーン体制〕のあとで、革命は、炎のような速さと激しさで、ヨーロッパを席卷しつつあった。パリからウィーン、パレルモ、ベルリン、ブダペスト、ミラノへと、1848年の2月24日から3月18日までに、内容も動機もさまざまな蜂起が大陸の諸政府を揺り動かし、開始の合図はいつものように、オルレアン公の専制を廃止し、共和国を宣言したフランスからやってきた。

こうした状況へのエンリコ・チェルヌスキの登場は、ミラノ蜂起を明瞭に記録したカルロ・カッターネオの印象的な一文に、正確に記されている。歴史家、経済学者、人類学者、社会学者、「戦闘的哲学者」として、長期にわたって活躍した学究の徒カッターネオは、不本意なが

らも研究から引き離され、あの5日間の市街戦のさなかに政治活動に引き入れられた。3月18日、カッターネオは、民衆反乱の兆しをこう記している。「群衆のなかから、若く意志固きエンリコ・チェルヌスキが現れ、オドンネル伯爵に3つの布告を出すよう示唆する。…そして、捕らわれの身となった伯爵を連行する」。混乱した暴動、市民のオーストリアに対する反乱は、このイニシアティブのうちに、革命の始まりをみた。オーストリア副総督オドンネルは、チェルヌスキにより、市民軍の創設、警察の廃止、市庁舎への武器引き渡し承認を余儀なくされ、さらに、軍当局の権限停止と権力委譲を公式に認めなければならなくなった。オドンネルの拘束は、最初の反乱行為であった。

3月18日から22日にかけて、ミラノでは、路上や屋上で、絶え間ない鐘の音のなか、不利な装備のもとに多大な命を犠牲にしつつ、市街戦がくり広げられた。22日夜、ラデッキ将軍とオーストリア軍はミラノを去り、将軍の剣は反徒の手で、まさにチェルヌスキに渡された。

反オーストリア蜂起の勝利における、この若いミラノ人の貢献は、政治的にはいうまでもなく、組織的・戦略的にも重要であった。テルツァーギやクレーリチ、生涯の師であり、友人であったカッターネオらと同じく、ミラノの闘いを作戦面で指揮する戦闘委員会のメンバーとして、チェルヌスキは、洞察力と力量ある人物としての印象をとどめている。たとえば彼は、気転を利かせ、私人の屋敷に捕虜とともに閉じこもることを考えついた。入り口の曲がりくねった道が敵の侵入を防ぐうえ、中庭は防衛線と複数の逃走経路を提供してくれたのだ。さらに、おそるべき「イバラ」の一式、つまりはハプスブルグ騎兵隊の突撃を粉碎するハリネズミのように巻いた鉄線を備え、必要に応じて固定したり移動したりするバリケードのうえに、新しい工夫を持ちこんだ。なかでも、小気球を用いたり、「マルティニッティの子供たち」を伝令に使うという工夫で、ミラノ郊外にも主張やニュースを送るというアイデアは、彼によるものだった。「マルティニッティの子供たち」とは、ミラノで1530年に創設されたカトリック慈善施設の孤児たちである。それとわかる制服で、都市の闘いの拠点を効果的につなぐべく、いたるところにたちあらわれたこの子供たちを、チェルヌスキは決して忘れることなく、のちに莫大な遺産をこの施設に贈るのである。

政治的に重要なことは、ミラノの政治勢力のなかで穏健派が幾度となく提案した、休戦や駆け引きによる蜂起粉碎の試みに対して、チェルヌスキがカッターネオや戦闘委員会とともに反対し、非妥協的態度を示したことである。それ以上に注目すべきことは、オーストリア撤退後のミラノ臨時政府で幅をきかせる穏健派や貴族が、カルロ・アルベルト王の密使と協調し、ミラノおよびロンバルディアをサヴォイア家ピエモンテに即時併合しようとしたことに対し、彼が頑として反対したことである。こうしたことを、のちにカッターネオは、「人民の闘いの、王国政治への不幸な従属」とよんだが、チェルヌスキは、彼と一緒に『悪童魂』(Lo spirito folletto) や『労働者』(L'Operaio) などの民主主義紙上で活発に毒舌をふるって、あるいは、ミラノ人の流血の衝突によって得られたつかの間の自由が、反啓蒙主義的・保守的な君主制に奪還されないための抗議デモを動員して、粘り強く闘った。

いわれのない告発で二度の逮捕と釈放を経験したチェルヌスキは、カッターネオと同じく、二度敗北した。はじめは、巧妙に操作された人民投票をもって5月12日以降に既成事実となった、サルデーニャ王国へのミラノ併合によって。二度目は、ピエモンテ軍に軍事的主導権を委託して緊急時の行動を誤り、サヴォイア軍の敗北、そしてミラノ降伏とオーストリアの再占領を招いたことによって。チェルヌスキは、友人カッターネオのように事実経過を歴史論文として書くことはなかったが、1848年夏以降の迷いのない行動には、ミラノ革命の教訓が作用していることがわかる。強力な軍に対する蜂起の勝利は、職人、労働者、小売商人、下層民といった非武装市民の功績によるものである一方、あとからきた貴族の政治的・外交的介入が、その成果を無にしたことを、どうして忘れることがあろう。チェルヌスキの民主主義的・共和主義的傾向は、それゆえにいっそう強まったのである。

チェルヌスキはこう記した。「死は、5日間のうちに少しずつ、高潔な人々の名誉となった。民衆は、名もない命をもって敵の力をそいだ。そのあとで、愚鈍な貴族が革命をとりあげ、民主蜂起に絶縁状を突きつけた。貴族のイタリアは、永久に外国勢力のものだ。すべての民衆はそれを見て、みずから立ち上がり、勝利を得、…『イタリア共和国』と記された徽章や貨幣をつくるだろう」。

まずスイスのルガーノに逃れ、次いでジェノヴァ、フィレンツェへと移ったチェルヌスキは、マッツィーニからさえも距離をおくようになった。現実的判断を欠くゆえに失敗をくりかえす、統一という第一目的にすべてを傾けたマッツィーニの行動は、しだいに公然たる批判をよび起こしていた。数カ月のうちに、教皇国首相ペレグリーノ・ロッシの暗殺と教皇ピオ9世のローマ脱出が、予想外の新たな革命状況をもたらした。チェルヌスキは、ミラノでは解放を求める蜂起の熱意と創意にあふれた局面を経験し、ローマでは、臨時政府の一員として、短期間ではあるが精力的な憲法制定活動に加わった。二つの場面に共通するのは軍事指揮という役割だけだが、ミラノとローマの経験は、チェルヌスキの人生においてはまとまったひとつの革命となり、その相違し、補いあう二つの部分を表している。

1849年2月12日、チェルヌスキはカッターネオにあてて、実験的局面への参加を促すべく「我々は共和国を建設した」と記す。27日には、改めて次のように知らせている。「ローマの選挙で、私は人民から代表として選ばれた。…あらゆる併合と戦争に対して闘うつもりだ」。事実、とくにマッツィーニ主義者は、トスカナ大公国との併合を切望していたのだが、チェルヌスキはそれを「混乱」の元として拒否し、こう明言した。「まず王たちを追放し、それから外国軍を追いだし、そのうえで我々の思うように政治状況を整理しよう。それしかない」。

戦争について、チェルヌスキは防衛を心がけ、技術的観点から軍事面での準備不足を指摘して、皮肉った。「武装は急にはすまない。銃を入手する技術は、賢者の石の技術よりも難しい」。

チェルヌスキは、財政問題に対しても、政治上・制度上の選択に対しても慎重であった。ピオ9世のよびかけ「最愛のカトリック国民へ」に応えたフランスが、教皇を救うべくウディノ

一将軍を派遣したとき、チェルヌスキは、攻撃に備えた武装防衛の必要と、流血の衝突を避けるための外交的対話の開始とを、ひとつの総合戦術として主張した。だから、対フランス軍交渉委員会への参加と、バリケード戦組織委員会における彼の指導的立場とは、相互に補完しあうものなのだ。彼は、多くの政令作成にあたる制憲議会の任についたが、抵抗が失敗に終わると、次のような最後の政令を記す役をも果たした。「当議会は不可能となった防衛をやめ、職務を続けている」。徹底抗戦というマッツィーニの提案にも、ラツィオ地方かロマーニャ地方のどこかで闘いを継続すべく退却するというガリバルディの提案にも反対して、チェルヌスキは、協定も降伏条約も求めず、ただ差し迫る敵勢力への正面攻撃を中止するという案で、制憲議会の支持を得た。

この誇り高き結末は、彼の回想のなかで、いかめしい古代ローマ共和国の徳への回帰という象徴的な意味を帯びる。「我々は、カンピドリオの丘に座っていた。侵略者ガリア人は元老院に押し入り、議員たちに賛成を強要したが、我々から降伏ということばを引き出すことはできなかった」。ガリア人の略奪の猛威に対した古代の元老院と同じく、1849年においても、制憲議会議員の正当性はフランス軍に屈服したが、敵にも尊敬の念を喚起せずにはおかなかった。

(3) 政治的市民社会の構想

チェルヌスキは、先述した裁判執行までのあいだ、フランス軍に逮捕され、チヴィタヴェッキアで長期にわたって囚われの身となった。自身のみごとな自己弁護と多数の友人たちの熱心な助力によって、有利な判決が得られた。牢獄での1年以上におよぶ強制的な活動停止も、カッターネオやジュゼッペ・フェッラーリの助言によって幅広い読書の機会となり、彼の歴史と政治のヴィジョンは、いっそう核心的で輪郭のはっきりしたものとなった。では、「奇跡の年」といわれるあの1848-49年を経た、チェルヌスキの政治的信条はどのようなものなのか？

チェルヌスキはもちろん、整然とならんだ体系的な著作から着想を得るような政治理論家ではない。だが、およそ10年後にカヴール伯との応酬でみせた論争的態度のように、友人への書簡や断章やメモからは、政治的市民社会の明確な構想がうかがえる。世俗主義、共和主義、連邦主義がよりどころとなる原則である。チェルヌスキは、フェッラーリと同じく、「革命の主たる障害のひとつは教皇庁であり、革命家のもっとも重要な任務は、その破壊にある」とした。チェルヌスキは、カッターネオに対しては冗談半分に、また、カヴールに対しては挑発的に、思惑どおりにサン・ピエトロ寺院を「爆破」できなかったことを悔んでいるが、ことさらに誇張されたこのイメージは、イタリア史における真の自由の発展のすべてをことごとく抑制したものとして、ローマにおける、そして人々の意識における、教会の世俗権を暗示するものであった。1848-49年のできごとは、彼によれば、一方の民衆と、他方の君主政と教皇支配のあいだに「自由勢力とその反対勢力とを分かち明らかな溝」を刻んだのである。

チェルヌスキがかたくなに共和主義を支持していたことは、イタリア各地の君主政および君主政そのものの性質であるとした反啓蒙主義思想、王家のエゴイズム、専制主義的傾向に対す

る彼の批判を考えれば、ただちに明白となる。チェルヌスキの共和主義的信念は、フランスのそれに対する純粋な賛美によって活気づき、社会の市民的發展と自己解放に対する激しい渴望を糧にしていた。そしてこの信念は、1849年から1851年にかけ、イタリア統一という目的を達するためなら、民主主義的・共和主義的主張を犠牲にしてもピエモンテ王の主導権を保証しようとする、マッツィーニ派のリソルジメント構想と対照をなすものとして明確になる。このことが原因で、マッツィーニとの断絶はまもなく明らかとなるが、そうした意見の相違が、独自の機関紙をもつ、イタリア人亡命者による新たな連邦共和主義グループの形成のきっかけとならなかったのは、ジュゼッペ・フェッラーリが構想し、チェルヌスキ自身も賛同したこの計画に参加をしぶったカッターネオの、頑迷な消極性によるのである。

連邦主義とは、結局のところ、チェルヌスキにとっては単に国家と社会の暫定的な組織モデルであるだけでなく、自由の行使と、市民的發展と、経済成長とを保証しうる、イタリアに適した唯一のモデルなのである。カッターネオは、非常に精力的な研究とすぐれた理論をもって、連邦主義と政治参加の不可欠の結びつきや、小規模国家の自由と政治的重要性を、さまざまな形で提示した。カッターネオと連邦主義を論じたチェルヌスキもまた、スイスや米国のモデルに注目し、地理的・歴史的に複数の中心をもつように形成されたイタリア社会の活力と多様性を生かす唯一のありようとして、小共和国、というよりむしろ「無限小の共和国」に思いを馳せた。

「直感的にも熟慮のうえの確信においても連邦主義者である」チェルヌスキは、1861年にはカヴールの批判に応え、この亡き政治家にしかるべき敬意をはらったのちに、イタリア統一の経緯に対する自身の違和感を表明しようとした⁽¹⁾。それは、王政の主導により、リソルジメント運動の自由主義的・近代主義的可能性が損なわれ、歪められたとみた人間の、決定的な異論であった。チェルヌスキは、新生王国を砂上の楼閣とみなしていた。イタリアは、地域間の競争によって互いの活力をかきたてるところか、活力を麻痺させる恣意的な画一性の網に覆われたのだ、と。法的・財政的・行政的統一は、彼にとっては、地域社会の「利益、習慣、自覚」を損なうものであり、「慎重で、地域の必要にみあった、議論にもとづく漸進的な改良」をもって自由な発展に適した法を備えもつ権利を、市民から取りあげるものであった。

チェルヌスキのフランス亡命は、1850年夏にさかのぼる。ナポレオン3世の帝政に対する反体制活動によって1870年4月に被った追放の時期を別にすれば、この第二の祖国としての選択は、死にいたるまで変わらなかった。

これは、チェルヌスキが亡命者同士の議論から離れていたことや、共和主義者・改革者としての祖国に対する情熱が、突如として薄らいだことを意味するのではない。当初は勢いのあったヨーロッパの諸革命はことごとく抑制され、ルイ・ナポレオンのクーデター以降のフランスの後退は、多くの希望と予想を裏切るものであった。チェルヌスキの亡命は、こうした国際情勢の変化のなかで、民主主義運動再開の可能性がしだいになくなっていくのにともない、敗北の経験が、彼の政治闘争への熱意を徐々に鎮めるにいたらしめたとともに、なみなみならぬ経

済的困難に直面することを余儀なくされた彼が、相応の生活基盤を探さなければならなかったということなのだ。

(4) フランスで、亡命者、銀行家、経済学者として (1850-1872)

チェルヌスキが避難所を求めたフランスは、まさに経済成長のただなかにあった。抑圧的で不安定な革命の局面は終結し、第二帝政はより有利な景気状況を始動させるための安定と確実さを提供し、自由貿易思想の普及につごうのよい枠組みとなった。なお農業にしっかりと根をおろした生産システムのなかで工業発展を起動させるためにも、またとりわけ、先の停滞期における遊休資本を新企業家層の新事業に投資するための資本流通や企業援助を目的とする、多様な銀行制度を発展させるためにも。こうした経済面・金融面での近代化は、著しい資本輸出を特徴としていた。第二帝政期におけるフランスの対外投資額は、年平均5億5千万フランで、王政復古期の年平均値の6倍にもおよぶ。この資本流出は、ハプスブルグ帝国やイタリアでは鉄道建設に、東方ではスエズ運河の一部に、あるいは採鉱や鉄鋼業、政府への貸付など、多種多様な事業に向けられた。急激な経済成長は、技術と生産の進歩、とくに銀行や株式市場を中心とする商業および金融活動に、突如として新たな可能性を開いた。これはフランスに限られた現象ではなく、フランスは、まさに1850-1870年の20年間に、世界の商取引が260%も増加するという、より大胆で顕著な時代の流れに参入していたのである。自由貿易の処方箋と、蒸気機関による交通手段の各地への到達により、全世界は、はじめて統制可能な統一経済圏となった。

チェルヌスキが、この膨張しつづける特異なサイクルの魅力に出会い、これを認識しないはずはなく、彼は独学で必要な基礎知識を身につけると、発展しつつある金融業界のもっともダイナミックで刺激的な場で実務についた。1852年、開設まもない初の大産業投資銀行、エミールとイサークのペレール兄弟が経営するクレディ・モビリエに就職したのである。のちにこの銀行の取締役の一人となったことは、彼がそこで得た評価を証明している。1856年、取締役会からこれまでの功績を賞賛されながらも、チェルヌスキが辞任を決めたとき、クレディ・モビリエは、6000万フラン以上の自己資金と1億フラン以上の預金とを現金で保有する、フランス一の強力な貯蓄銀行となっていた。

パリの証券取引所で活躍するこのミラノからの亡命者は、友人カッターネオからその経済的成功を祝福され、別の意味でも目標に達するように促される。カッターネオは、ルガーノでチェルヌスキにこう書いた。「政治にかかわる者は、まともに力をもとうとするなら、少なくとも10万フランは銀行にもっている必要がある」。10万フランの目標はほどなく達成しえたが、1858年に彼が興したパリ市場での食肉販売にあたるチェーン店「新食肉産業」は、3年ほどで破産が明らかとなった。チェルヌスキは、蔵相ベイがすぐれたコンサルタントとしての彼に行ったインタビューを掲載した興味深い小冊子のなかで、この経験を語っている。彼は、少々変わった消費協同組合を創設するという自身の試みを、厳しい自己批判をもってふり返り、その

失敗を一般化して、協同組合そのものに対して賛同しかねるほどの否定的判断に到達している。

それでも、この小冊子は、チェルヌスキの行動と思考の方法を示す興味深い資料である。市場調査に対する統計学的興味と早い段階での注目。不正価格や粗悪品から消費者を保護し、彼の素朴な「善良な人々への熱愛」を満足させる企画事業の実現。成功の要因としての広告への注目。協力者の慎重な選択。企業の弱点のすばやい知覚。この作品からは、彼が数年後の著作で「交換の力学」とよぶことになる、経済の一般行動原則にも配慮した、現実主義的アプローチの成熟がみてとれる⁽²⁾。チェルヌスキは、1850年代の漠然としたブルードン主義を脱し、市場原則の受容に到達したが、それでも、イギリスの労働組合運動とその労働権擁護の効果については、共感を示しつつけた。「世界は競争にさらされているから、自衛しなければならない」、彼はこう記している。

「新食肉産業」の一件は、彼の急速ではなばなしい経済的躍進のなかの唯一の失敗であり、彼の成功は、順調な証券取引業務と評価の高い広範な商取引仲介業務を支えとしていた。チュニジアでは、総督への貸付けで契約者の双方を満足させ、ロンドンでも、このミラノ出身の弁護士は、そのまじめさと洗練された礼儀正しい態度を賞賛された。

しかし、もっとも重要な事業は明らかに、彼の構想した新銀行の設立計画にある。この銀行は、1860年代後半の金融危機の際にも、フランスの銀行組織の信頼性をもってすれば成功し得るものとされた。1867年には、不良債権を過剰に抱えたクレディ・モビリエが倒れ、1869年にはクレディ・フォンシエが破産していた。審査委員会の調査と選考を通ったチェルヌスキの計画は、パリ銀行の基礎を築き、これが1872年にペイ・バ銀行との合併でパリバ銀行となり、ヨーロッパ金融界の一大拠点となったのである。安定資金と準備金を増大させたこの銀行は、自らの資産強化のために堅実な経営戦略をとった。株式投機から手をひき、短期預金を手控えさせ、公債募集も引き受けようとしなかった。だが非常に興味深い例外は、1872年に戦勝国ドイツ帝国が課した賠償金を工面するために発行された国債で、パリバ銀行だけでおよそ80億フランもの引き受けに応じたのである。

チェルヌスキは、パリ銀行の3名の総裁の1人として、1870年代初頭には、もはやフランスでもっとも著名な実業家の1人となっていた。それでも彼は、友人カッターネオの教示を忘れず、自分を受け入れてくれたフランスのゆく末に共和主義的な方向で影響を与え、その政治的バランス軸を動かすために、自身の財産を用いることを怠らなかった。穏健共和主義をとるパリの日刊紙『世紀』(Le Siècle)の経営権取得、ナポレオン3世の命による1870年の人民投票の際に、民主主義左派の団体におこなった多額の資金援助。こうしたことによって、チェルヌスキの政治傾向は、再び明確で、体制と対立するものとなった。敵の反撃はすばやく、明快であった。1870年4月30日、国外追放の宣告をうけ、ジュネーヴに逃れることを余儀なくされたチェルヌスキは、許容されながらもつねに弱みを抱えている異邦人という立場を思い知ったのである。それでも彼は、まもなくジュネーヴを離れ、同年9月4日のフランス第三共和

国宣言に立ち会うことができた。フランスの共和主義・民主主義の大いなる伝統は、つねにチェルヌスキのモデルであり、政治的着想の原点であったが、その伝統をよみがえらせようとする希望は、ついに実現されたかに見えた。市民権の請求が正式に認められたこと、フランスを「共和国なる我が祖国」と自ら呼んだことによって、チェルヌスキは、フランス人としての完全な身元確認をついに行ったのである。

しかしパリ・コミュンにより、情勢は劇的なまでに混迷した。パリ補給委員会のメンバーであったチェルヌスキは、やがてコミュン政府からは距離をとり、その政治路線を評価しなくなったようだ。コミュンの命により、日刊紙『世紀』の編集者でもあった彼の友人、パリ副市長ギユスターヴ・ショーデが銃殺されたことは、チェルヌスキに深い衝撃を与え、彼は、テオドル・デュレとともに、アメリカや東洋への長旅に出る決意を固めた。そして、この旅が東洋美術との出会いの契機となって、ヴェラスケス通りの住まいをかねた博物館に注がれる、彼の蒐集家としての独特の情熱が喚起されることとなる。

(5) 結論

チェルヌスキの晩年の人生は、相変わらず共和派民主主義を支持する言動に彩られているが、長々と論じるのはやめよう。1873年、1877年の選挙戦で共和主義者を支持したほか、とくに1889年には、反動的・軍国主義的転換の信奉者であるブーランジェ將軍の勝利を危惧し、対立候補を推した。イタリアに関しては、勧めがあっても選挙に出ることはなく、唯一その無然とした沈黙を破ったのは、1890年、クリスピとその反フランス・親ドイツ政策に抵抗したカヴァロツィ率いる急進党に、資金を提供した時であった。最後に、通貨制度の選定論争に、彼が経済学者、貨幣論学者として熱心に参加したことに触れておこう。この論争は、金銀複本位制か金本位制かの選択をめぐり、いくつもの国際会議や欧米の各国政府、多くの研究者を長期にわたって巻きこんだ。チェルヌスキは、大規模な通貨外交ともいえるべきものに努力し、ロンドンやワシントンで衆目を集める報告者となった。彼は金銀複本位制を信奉したが、彼が固執したこの立場は、新鉱脈の発見による銀価格下落の打撃のもとでは時代おくれの方策であり、恒常的な通貨不安の原因と見えざるをえなかった。

これが、経済学の分野における彼の最後の仕事であった。チェルヌスキは、「改革者が進路を誤ると、人民に高くつく」と記し、「民主主義にとって必須の補助手段」として経済学を熱心に学んだのである。彼は1896年、イタリア国境までほんのわずかなマントンの地で没した。

〔訳註〕

- [1] *Risposta alla accusa fattami dal sig.r ministro Cavour*, Milano, 1861; trad. franc.: *Réponse à une accusation portée par M. de Cavour*, Paris, 1861.
- [2] *Mécanique de l'échange*, Paris, 1865; ediz. ital.: *Meccanica degli scambi*, Milano, 1871.

【解説】

フランスでは Henri (アンリ)、イタリアでは Enrico (エンリコ) の名をもつ、このチェルヌスキという耳慣れない人物は、日本はもとよりイタリア、フランスでもほとんど研究されていない。ここに訳出した報告からもうかがえるように、チェルヌスキは、本国イタリアで革命運動に参加したのち、フランスへ亡命して経済界で活躍、晩年には東洋美術の蒐集に没頭し、折しも「ジャポニズム」にわきたつ世紀末フランス美術に影響を与えた。

本年6月に行なわれたシンポジウム「H. チェルヌスキ (1821-1896) : その政治・経済活動と東洋美術蒐集」(Henri Cerunschi : 1821-1896—Homme politique, financier et collectionneur d'art asiatique—は、パリ市立チェルヌスキ美術館の開館100周年を記念して日仏会館、イタリア文化会館、日仏美術学会が共同で開催したもので、計6本の報告の大半は、彼の東洋美術コレクションとその評価に関するものであった。

エリザ・シニョーリ氏は、このシンポジウムでイタリアからのただ一人の報告者で、現在パヴィア大学で講師をつとめる。彼女の報告は、イタリアでの革命運動と、パリでの実業家としての活躍という、一見相反するチェルヌスキの二面性を、ともに共和主義的信条に貫かれたものとして描いた大変興味深いものである。チェルヌスキに関しては、イタリアにもまとまった研究はなく、彼を専門とする研究者もいないらしい。今回の報告は、ファシズム期のイタリア政治亡命者研究を主たる専門とするシニョーリ氏が、このシンポジウムにあたってまとめたものである。日仏会館ではこのシンポジウムの報告集刊行を予定しており、そこにはシニョーリ報告も、加筆訂正のうえイタリア語で掲載される。

なお、1848年のミラノ革命におけるチェルヌスキの役割については、最近出版された、黒須純一郎氏の「イタリア3月革命—『ミラノの5日間』の社会史—」(的場昭弘・高草木光一編『1848年革命の射程』御茶の水書房)でも言及されている。また Ist. della Enciclopedia Italiana, *Dizionario biografico degli italiani*, Roma, 1979. には、F. デッラ・ペルータによる、チェルヌスキの生涯・著者および関連文献の詳細な紹介が見られる。さらに、N. Rosselli, *Saggi sul Risorgimento*, Torino, Einaudi, 1980, pp. 196-197. には、チェルヌスキが G. モンタネッリにあてた書簡が4点、収録されている。

最後に、訳者から、イタリアにおける1848年革命の状況と、リソルジメント(イタリア統一運動)におけるチェルヌスキの位置について略述しておこう。

1848年当時、ウィーン体制下のイタリアは、中世以来の小国分立状況のなかで、全土が直接・間接にオーストリアから支配をうけていた。ヨーロッパ大陸を席卷した復古王政に対する革命の波は、ドイツやチェコ、ハンガリーと同様、イタリアでは国家の独立と統一を求める蜂起となってブルジョアジーと都市民衆の双方を巻き込み、多くの主要都市で展開された。チェルヌスキが参加したミラノとローマの革命は、そのなかでももっとも激しい闘いとして記憶されている。

「リソルジメント」の発端は、フランス大革命時のジャコバン派に影響をうけた「ジャコビ

ーニ」(民主主義者)による各地の蜂起行動にさかのぼる。しかし、それらは、そのあと復古王政の下でもしばしば起こった蜂起と同様、あくまでも分裂した諸邦内での民主化を求める闘いであった。その意味で、イタリアの1848年革命は、外国勢力に対して半島の独立と統一を明確に意識した最初の闘い、「第一次独立戦争」でもあった。

だが、「独立」後の構想は革命勢力のなかでも定まっておらず、また、ヴィジョンの相違は、民衆による革命運動の激化をおそれ、統一事業を当時のイタリア唯一の独立国、サルデーニャ王国(サヴォイア家の“ピエモンテ”)にゆだねようとする「穏健派」と、民衆の手による共和政国家の樹立をめざす「民主派」のあいだにだけ存在したのではなかった。1848年革命を契機に、新しい国家と社会をめぐる意見の相違は、「民主派」の内部でも顕在化してくる。中央集権国家としてのイタリア統一を求め、そのためには「穏健派」との妥協もいとわないマッツィーニ派と、君主政や教会支配を革命の阻害要因とみて、諸地域の歴史的・文化的多様性を生かした連邦共和政国家をめざすカッターネオやフェッラーリとの対立は、そのもっとも大きなものであった。このとき、カッターネオとも親交の深かったチェルヌスキは、明らかに後者の側にいたのである。

イタリアの1848年革命は、外国勢力の攻撃と、「穏健派」の戦線離脱のなかで終結した。サルデーニャ王国のカロロ・アルベルト王は、蜂起の勢いにおされて対壕宣戦を布告したものの、戦局が悪化すると、戦いつづけるミラノの民衆を尻目にあっさり休戦を受け入れた。当初はイタリアの独立を訴え、蜂起の支持を表明していた教皇ピオ9世は、ローマにおける革命運動の激化を前に逃亡し、フランス軍に救援を求めた。シニョーリ報告に見られるように、チェルヌスキは、こうしたなかで穏健派的妥協の一切を拒否し、また、パリで財界人として名を遂げてからも、王政・専制への反対を貫いた。

しかし、リソルジメントの「民主派」は、この1848年革命に敗北しただけでなく、その後の統一国家の成立においても「穏健派」のカヴールにイニシアティヴを握られた。それは、のちにグラムシが分析したように、総体としての「民主派」が社会革命の構想を欠き、そのために、大多数が農民であるイタリア民衆を支持基盤として獲得しきれなかったことによるのである。これとの関連で付言するなら、チェルヌスキは、「農民革命」を志したピサカーネや、「農地均分法」による「貧民の解放」を構想したフェッラーリのように、1848年革命敗北の根本的な反省をふまえて新しい思想的地平に達することはなかったように思われる。

フランスに対しても、チェルヌスキが理想としたのはあくまでも共和主義のフランスであっただろう。シニョーリ報告にみる限り、一時はプルードンの影響を受けたとあるが、彼が社会主義というフランスのもうひとつの伝統に関心を示した形跡はうすい。亡命後のチェルヌスキが共和主義者でありつづけたとしても、その立場は、すでに世紀末のフランス社会を変革する力をもつものではなかっただろう。チェルヌスキが、経済界での活躍や共和主義勢力への支援を通じてパリの政治・経済に及ぼした影響については、さらなる研究が期待されるところである。だが、パリ・コミューンを契機とするアジア旅行への出発は、チェルヌスキ自身が、産業

社会の急激な発展のなかでは、経済活動を手段とする「革命」構想がもはや時代を動かす力とはならないことに気づいてしまったためではなかっただろうか。

チェルヌスキが東洋へと旅だった1871年、イタリアでは、パリ・コミューンの評価をめぐってマッツィーニ派と「インター派」の対立が鮮明になる。ここで「インター派」とは、各地のアナーキスト、社会主義者、連邦主義者等々の、もとは「民主派」であった若い人々を中心に形成されたグループの総称である。「インター派」は、明確な思想性によってまとまった集団ではなかったが、コミューンの階級闘争的性格と分権的志向とを非難したマッツィーニに対し、「貧民の革命」としてのコミューンを擁護して、国家統一という政治問題以上に「社会問題」の解決が重要であることを訴えた。こうしてイタリアでは、パリ・コミューンをひとつの契機として、かつての「民主派」のなかに、社会革命によって自らの敗北をのりこえようとする新しい方向性が生まれてくるのである。一方、チェルヌスキは、パリにいなながらも1848年の記憶にとどまりつづけたとはいえないだろうか。1861年6月29日、パリのチェルヌスキは、ミラノ革命の同士であったG.モンタネッリへの手紙を次のように結んでいる。「1848年3月にミラノではじめて会ったときのように、君をだきしめて……」(Rosselli, op. cit., p. 197)。

(本学講師)